

輪島塗

Wajima nuri



輪島塗のあらまし

輪島塗がどのようにしてはじまったのかは、裏付けとなる資料が少なく、はっきりとはわかっていません。しかし、現在の輪島塗に使われている珪藻土が、輪島周辺で出土した中世の漆器にも含まれていたこと、またいくつかの記録から、室町時代には漆器作りが行われていたと考えられています。

漆器作りが発展した要因として、近隣にアテ、ケヤキ、ウルシ、輪島地の粉など、材料となる素材が豊富にあったことや気候風土が漆器作りに適していたこと、古くから日本海航路の寄港地として材料や製品の運搬に便利であったことなどがあげられますが、漆器の生産・販売にたずさわってきた多くの人々が、品質に誇りを持ち、技術を磨き続け、今日まで受け継いできたことも大きな理由の一つといえます。

これらを背景として、「わんこう腕講」や「たのもしこう頼母子講」と呼ばれる独特の販売方法を普及させつつ販路を拡大し、全国的に知られるようになりました。

工程は分業であり、大きくは木地、塗り、加飾に分かれます。さらにその中で、椀木地、曲物木地、指物木地、朴木地、下地、上塗、呂色、蒔絵、沈金等に細分されています。

この分業体制を基本に、塗りで百以上の手数を経て、完成までに半年から数年の時間を要します。緻密な職能分化によって、技術の熟達と生産効率の追求が図られ、各分野の技は伝統として受け継がれ、守られてきました。

各工程の専門職人は自身の仕事に自負を持ち、丹精を込めて仕上げます。その全てを確認し、調整するプロデューサー役を果すのが塗師屋です。発注から販売、納品に至るまでを管理します。

うるしについて

うるしとは漆の木から採取した樹液です。丈夫で艶やかな質感をもつ塗料となり、強力な接着剤にもなります。東アジアの国々に分布し、日本では数千年前から利用してきました。

漆の語源は「うるわし(麗し)」「うるむ(潤む)」ともいわれ、みずみずしい艶を表しています。

固まると酸やアルカリにも強く、数千年の時を超えるほどの耐久性を有しています。縄文時代の遺跡から出土した漆製品では、木地が朽ち果てたにもかかわらず、漆そのものは色鮮やかに保たれていることが確認されています。

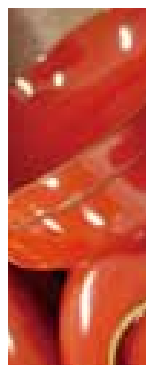
その一方で、漆は大変デリケートな素材でもあります。採った時間や天候、場所、採り方によっても性質が変わってきます。

一本の木から採れる漆の量は150gほど。椀数個分しか採れない、大変貴重な材料です。



漆器はエコロジー

自然の恵みである木材と漆で作った漆器は、ほとんどが天然素材であり、微少な生産エネルギーで、有害な物質発生させることもなく、環境汚染や自然破壊が極めて少ない産物です。



漆の時間

漆の乾燥は、普通の化学塗料等と異なります。漆の成分が空気中の水分と反応し、硬化するのです。実はこの反応、漆器の完成後もゆっくりと進んでいます。よって、塗りあがって間もない製品は、できるだけ優しく扱ってください。

1年もすれば普通に使えるようになり、使い込んで3年も経つと深い底艶が出てきます。

漆器の扱い方

漆器は普段の扱いにおいて、少しだけ気をつけていただきたいことがあります。これさえ守っていただければ、暮しを豊かに彩り、歳月とともに味わい深いものとなります。

洗い方



家庭用中性洗剤で普通に洗っても大丈夫です。研磨材入りの洗剤やタワシの使用を控え、表面がざらついた陶器等と別にして洗えば、キズが入ることを防げます。

避けて欲しいこと



電子レンジでは使わないでください。漆器が破損します。



また、食器洗浄機を多用することも避けてください。艶が失われていきます。



保管場所

直射日光が長期間あたる場所や、極端に乾燥するようなところは避けてください。

修理

傷が付いても補修や塗り直しができます。輪島では昔から「なおしもん」と呼び、作り手の責任として修理を行ってきました。

